

平成 26 年 10 月 3 日

南の風 83

南部ミニバスケットボール連盟
会長 藤原 敬一

ドリブルドライブモーションオフENSについて、2号にわたって書きました。しつこいようですが「形」を追うのではなく、それぞれの1対1を大切してください。一人ひとりが「攻める気」を持たないオフENSは、力強いものにはなりませんし選手個々の成長も期待できません。もちろん、低学年や経験のない選手が出場している場合は別です。

ここで、オフENS、ディフェンスに限らず指導する上での留意点を書きます。

まず大切なことは、82号にも書きましたが、一つの戦術（組織プレー等）を指導する時に、最初に「全体像」を選手に示すことです。「この戦術はこうなっている。全体の動きはこうだ。」ということを選択手にうつすことが大事です。できないながらも、おぼろげながらもいいのです。選手に「見通しを持たせるのです。」何回か全体像を示す中で、選手は戦術の流れを理解します。そして、分習（戦術の枝葉のスキル）に入ります。自分たちがやっていることは、「全体の〇〇の部分なのだ」ということを自覚することで、戦術把握が深まります。分習から入り、徐々に積み上げていく方法だと、選手は先が見えません。自分が取り組んでいることの立ち位置が分からないからです。

そして全体像が掴めたら、それぞれの場面で力強くプレーできるようにハビットに繰り返します。その時に忘れてはいけないことは1対1で攻めることです。何回も書きますが、「戦術の形だけを追うこと」はタブーです。

次に気を付けることは、プレーとプレーを繋ぐファンダメンタルのスキルをどう指導するかということです。例を挙げます。ドライブモーションオフENSのところで、「キックアウト」というスキルができます。高校生位になると、言われただけでキックアウトのパス（ドリブルから外へのサイドスナップパスなど）がすぐできるのですが、ミニバスのプレーヤーはそうはいきません。何回か経験させたり、取り上げて指導したりしないと身に付かないのです。ミニバスの場合、戦術を繋ぐプレーの指導が意外と面倒なのです。1つの戦術に付随するスキルの習得に追われ、指導が行き詰まることが多々あるのです。限られた練習時間の中で、5対5の中で取り組むのか取り出してスキルアップさせるのかが、指導者の悩むところです。私はパス系のスキルの場合は、取り出してレシーバーと合わせを指導します。シュート系やドリブル系は、5対5の中で触れる程度にし、後は個人練習に委ねます。

実はこういった細かい指導が、ミニバスでは面倒なのですが必要になるのです。実態を見ながらスキルアップを目指してください。

最後に、実際戦術を指導していく中で修正を加える場面があります。指導者は正しいスキルの定着を推し進めなければいけません。プレーヤーが、スキルを体現できなければ（ゲームできるようになること）本当に身に付いたとは言えません。プレーヤーがゲームで実際にできるようになって、初めて指導が実証されたこととなります。ゲーム中に「何回言われるんだ」「練習でやったじゃないか」といった言葉は禁句です。プレーヤーが体得できること（ゲームで）が指導の目的ですから。自らの自戒を込めて書かせてもらいました。また次号で。